

顕在的・潜在的シャイネスと文化的自己観，拒否回避欲求の関係

稲垣 勉*・澤海 崇文**・澄川 采加***

(2021年10月21日 受理)

The Relations of Explicit and Implicit Shyness with Cultural Self-Construal and Rejection Avoidance

INAGAKI Tsutomu, SAWAUMI Takafumi, SUMIGAWA Ayaka

要約

「対人場面において生じ，社会的不安と対人的抑制という特徴を持つ，情動的かつ行動的な症候群（相川, 1991）」と定義されるシャイネス（shyness）の測定には，これまで自己報告式の尺度が広く使用されてきた。しかし，近年は自己報告によらない潜在的な測定手法である Implicit Association Test (IAT) を用いた測定も盛んになっており，シャイネスにも応用されている。これまで，IATにより測定される潜在的シャイネスと他の心理的特性との関係がいくつか検討されてきたが，それらの研究に一つの資料を加えるため，本研究では顕在的・潜在的シャイネスと文化的自己観，拒否回避欲求との関係について検討した。大学生 58 名を対象にした調査の結果，顕在的・潜在的シャイネス尺度と他の尺度との相関関係は，男女間で異なるパターンを示した。これらの結果について，本邦におけるシャイネスのイメージの変化が影響している可能性を考察した。

Keyword : shyness, explicit shyness, implicit shyness, cultural self-construal, rejection avoidance

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 講師

** 流通経済大学 社会学部 准教授

*** 鹿児島大学大学院教育学研究科 大学院生

問題と目的

人々の中には「恥ずかしがり屋」「はにかみ屋」といった言葉で表現されるように、対人場面において抑制されたような感覚を持つ人もいる。こうした人が持つ特性は「シャイネス (shyness)」と呼ばれる。相川 (1991) によれば、シャイネスは「特定の社会的状況を越えて個人内に存在し、社会的不安という情動状態と対人的抑制という行動特徴をもつ症候群 (p.150)」と定義されている。

これまで、シャイネスの測定には自己報告式の尺度が多く用いられてきた。たとえば、相川 (1991) は 16 項目・1 因子構造の特性シャイネス尺度を作成しており、鈴木・山口・根建 (1997) は 25 項目、3 因子からなる Waseda Shyness Scale を作成している。また、桜井・桜井 (2000) は Jones & Russell (1982) の 21 項目からなる尺度を翻訳している。本邦におけるシャイネスの研究は、主にこれらの自己報告式の尺度を用いて進められてきた。

しかし、近年は自己報告によらない測定法を用いた測定が盛んになっており、Implicit Association Test (以下 IAT; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) を用いて潜在的な態度や信念、性格などの心的傾性を測定する流れがある。これはシャイネスも例外ではない (e.g., Asendorpf, Banse, & Mücke, 2002; 藤井・相川, 2013; Sawaumi, Inagaki, & Aikawa, 2019 など)。たとえば Asendorpf et al. (2002) は、IAT を用いて参加者の潜在的シャイネスを測定し、質問紙で測定した顕在的シャイネスと併せて、対人相互作用場面における参加者の行動との関連を検討した。その結果、IAT を用いて測定した潜在的シャイネスは姿勢の緊張など、自身でコントロールすることが難しいと考えられる行動指標を予測していた。これに類似した結果は、相川・藤井 (2011) や藤井・相川 (2013) において、本邦でも報告されている。

Asendorpf et al. (2002) を端緒として、潜在的シャイネスの測定に IAT が用いられるようになって 18 年が経過しているが、一連の研究には、行動指標や他者評定との関連を検討したもの (Asendorpf et al., 2002; 相川・藤井, 2011; 藤井・相川, 2013 など) や、他の特性との相関関係を検討したもの (Fujii, Sawaumi, & Aikawa, 2013; 藤井・澤海・相川, 2015 など) がある。特に後者に関して、シャイネス IAT の得点と自己報告により測定された他の諸変数との関連について、外向性とは弱から中程度の負の相関 (相川・藤井, 2011)、攻撃性の下位尺度である身体的攻撃や言語的攻撃とは弱い負の相関、主観的幸福感とは正の相関 (藤井他, 2015) が示されたほか、相川 (1991) の特性シャイネス尺度との間には、複数の研究において、有意でない弱い正の相関が見られている (相川・藤井, 2011; 藤井他, 2015 など)。また、シャイネス IAT の得点は自尊心 IAT の得点と負の相関を示したという報告もある (Fujii et al., 2013)。このように、シャイネス IAT が他の尺度とどのような相関関係がみられるかについては、一定の知見の蓄積があるといえる。

本研究は、顕在的・潜在的シャイネスと他の諸特性との相関関係をさらに広く検討するため、顕在的・潜在的シャイネスと文化的自己観 (Markus & Kitayama, 1991)、拒否回避欲求 (小島・太田・菅原, 2003) との関係について検討を行うこととした。顕在的・潜在的シャイネスとの関係を検討す

る変数の選択は、顕在的シャイネスとの関係が予想されるものを参考に行った。文化的自己観について、高田（1992）によれば、個人はそれぞれ他者から分離しており、それゆえに自己は自律的で独立しているという考えに基づく相互独立的自己観と、個人は互いに結びついており、個別的ではないという考えに基づく相互協調的自己観に分かれる。特に前者は欧米文化に、後者はアジアの文化によく見られるという。個人は他者から独立し、独自性を主張することが必要と考える相互独立的自己観が高い場合、自身を積極的に目立たせようとするため、シャイネスは低いと思われる。また、自分と関係のある他者と協調し、義理を立てることを重視する相互協調的自己観が高い場合、シャイネスは高いと思われる。また、拒否回避欲求は否定的評価を回避しようとする欲求であり、拒否回避欲求が高いほど、シャイネスも高いことが予想できる。

なお、文化的自己観や拒否回避欲求には性差も報告されていることから（高田, 2002; 谷, 2012）、本研究においては性差も検討に含めることとした。

方 法

参加者 九州地方の国立大学に通う大学生 58 名（男性 24 名、女性 33 名、性別無回答 1 名。平均年齢 19.25 歳、 $SD = 1.09$ 歳）を対象とした。

材料 本研究では、以下の尺度を用いた。

(a) 特性シャイネス尺度 相川（1991）が作成した 16 項目からなる尺度である。項目例として「私は人がいる所では気おくれしてしまう」、「私は他人の前では、気が散って考えがまとまらない」などがある。回答は「1: 全くあてはまらない—5: よくあてはまる」の 5 件法で求めた。

(b) 相互独立的自己観・相互協調的自己観尺度 高田（1999）による短縮版、10 項目を使用した。相互独立的自己観尺度は 4 項目、相互協調的自己観尺度は 6 項目からなる。前者の項目例は「自分の意見をいつもはっきり言う」、「いつも自信をもって発言し、行動している」などがあり、後者の項目例は「人が自分をどう思っているかを気にする」、「相手は自分のことをどう評価しているかと、他人の視線が気になる」などがある。回答は「1: あてはまらない—5: あてはまる」の 5 件法で求めた。

(c) 拒否回避欲求尺度 小島他（2003）が作成した賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度のうち、拒否回避欲求尺度 9 項目を使用した。項目例は「意見を言うとき、みんなに反対されないかと気になる」、「目立つ行動を取るとき、周囲から変な目で見られないか気になる」などがあり、回答は「1: あてはまらない—5: あてはまる」の 5 件法で求めた。

(d) シャイネス IAT 日本語版（以下、シャイネス IAT） 相川・藤井（2011）が作成したものをを用いた。IAT は、画面上に連続して表示される単語の分類課題を行い、特定の概念間の連合を測定するものである。カテゴリ次元（自己—他者）と属性次元（シャイな—社会的な）に関連する刺激語（e.g., 私, 知人, 控えめな, 打ち解けた）について、対応するキーを押下することで単語のグ

ループ分けを行う。可能な限り速く正確に行うという教示の下で、カテゴリー次元と属性次元が組み合わされた課題を2種類（そのうち1種類は組み合わせが逆）を行い、反応時間が短い組み合わせ課題の方が、対になっているカテゴリーと属性の連合が強いと考えられる。「自己—シャイな（他者—社会的な）」の組み合わせ課題にかかる時間が「自己—社会的な（他者—シャイな）」の組み合わせ課題にかかる時間より短いほど、当人の潜在的シャイネスが高いと判断される。

手続き 講義前後の空き時間などを利用して参加者に質問紙を配布し、(a)～(c)の各尺度への回答を求めた。その後、PCを用いた課題への参加を依頼し、Inquisit Web Licenseを用いて(d)のシャイネス IAT への回答を求めた¹。調査用紙の配布時や IAT の実施前には、参加者に対し、本調査への参加は任意であることや、途中で中止することも可能であることを説明し、個人を特定するような形式での公表は行わないことを約束した。その上で、同意する者のみ、調査への協力を依頼した。調査終了時に、参加者には謝礼として Quo カード 500 円分を渡した。上記の他にも心理変数を測定しているが、本研究の目的とは直接関連しないため、報告は割愛する。

結 果

データの得点化 各尺度について、逆転項目のある項目は逆転処理を行い、合算平均得点を求めた。IAT は *D* 得点 (Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003) を求めた。いずれも得点が高いほど、当該尺度名の傾向が強いことを示す。各尺度の信頼性の推定値として Cronbach の α 係数を算出したところ、その範囲は.73—.88 であり、各尺度は一定の信頼性を有すると判断した。

各尺度の記述統計量および各尺度間の相関係数 各尺度の記述統計量および各尺度間の相関係数を求めた結果を Table1 に示す。分析の結果、特性シャイネス尺度得点とシャイネス IAT 得点は、相互協調的自己観・相互独立的自己観、拒否回避欲求の各尺度得点と同程度・同方向の相関係数を示した。すなわち、特性シャイネス尺度およびシャイネス IAT の得点が高いと、相互協調的自己観尺度および拒否回避欲求尺度の得点は高く、相互独立的自己観の得点は低かった。また、特性シャイネス尺度得点とシャイネス IAT 得点の相関係数も正の値で、有意であった。

¹ 質問紙を配布した際、後続の実験 (PC 課題を行うもの) にも協力してくれた場合、謝礼を渡す旨を説明した。その結果、質問紙を配布した 151 名のうち、141 名からメールアドレスを得られた。そのメールアドレスに後続の PC 課題の案内を送付し、本文に記した 58 名から協力を得ることができた。希望者数に比して実施者数が少ないが、メールの受信設定の問題で不達であったことが後から分かったケースなどがあつたほか、調査の依頼が授業期間中であつたことも実施者数が少なくなったことの一因であると考えられる。今後はこうした点にも配慮してリクルートを行うべきであろう。

Table1 各尺度の記述統計量および各尺度間の相関係数 (N = 58)

	2	3	4	5	α	M	SD
1 特性シャイネス	.29 *	.35 **	-.59 **	.37 **	.88	3.11	0.65
2 シャイネス IAT	—	.28 *	-.40 **	.39 **	—	-0.23	0.45
3 相互協調的自己観		—	-.60 **	.70 **	.74	3.86	0.57
4 相互独立的自己観			—	-.69 **	.73	2.84	0.70
5 拒否回避欲求				—	.86	3.68	0.64

** $p < .01$, * $p < .05$.

男女別の検討 試みに男女別の各尺度の記述統計量および各尺度間の相関係数を求めた結果を Table2 に示す。各尺度の得点について、いずれも性差は有意には至らなかった ($ts \leq 1.60$, $ps \geq .12$)。男女をまとめて相関係数を求めた場合と異なり、男性において特性シャイネス尺度得点はシャイネス IAT 得点、相互協調的自己観、拒否回避欲求の各尺度得点との相関係数が有意ではなかった。女性においては、男女をまとめて相関係数を求めた場合と同様、特性シャイネス尺度得点とシャイネス IAT 得点は、相互協調的自己観・相互独立的自己観、拒否回避欲求のいずれの尺度得点とも同程度・同方向の相関係数を示した。すなわち、特性シャイネス尺度およびシャイネス IAT の得点が高いと、相互協調的自己観尺度および拒否回避欲求尺度の得点は高く、相互独立的自己観の得点は低かった。

Table2 各尺度の記述統計量および各尺度間の相関係数 (男女別)

	1	2	3	4	5	M	SD
1 特性シャイネス	—	.22	.28	-.52 **	.37	3.10	0.66
2 シャイネス IAT	.35 *	—	.17	-.32	.10	-0.34	0.45
3 相互協調的自己観	.41 *	.37 *	—	-.66 **	.81 **	3.95	0.48
4 相互独立的自己観	-.64 **	-.42 *	-.59 **	—	-.59 **	2.84	0.67
5 拒否回避欲求	.38 *	.59 **	.66 **	-.74 **	—	3.69	0.60
M	3.11	-0.15	3.80	2.84	3.69		
SD	0.66	0.45	0.63	0.74	0.68		

** $p < .01$, * $p < .05$. 注) 右上は男性 (N=24), 左下は女性 (N=33)。

考 察

本研究は、顕在的・潜在的シャイネスと他の諸特性との相関関係について、文化的自己観、拒否回避欲求を新たに取り上げ、検討を行ったものである。得られた結果について、特に男女別の結果に注目して、以下に考察する。

顕在的測度である質問紙を用いて測定した特性シャイネス尺度の得点と、潜在的測度である IAT を用いて測定したシャイネス IAT の得点の相関係数は、女性のみ正の値が有意であった。また、男女別に検討した場合、男性において特性シャイネス尺度の得点はシャイネス IAT の得点、相互協調的自己観、拒否回避欲求の各尺度得点との相関係数が有意ではない一方、女性ではこれらの値は有意であった。今回のような結果が得られたことについて、一つの解釈として「シャイネスのイメージ」に着目して述べたい。

従来、自身がシャイであることを表出することは、社会的にネガティブな評価を受ける可能性があるとしていた (Zimbardo, 1977)。しかし近年、本邦においてシャイネスに対するイメージはポジティブに変容している (藤井・澤海・相川, 2016)。藤井他 (2016) は、16 歳から 69 歳までの 1448 名を対象に調査を行い、シャイネスという言葉に対して、肯定的あるいは否定的な意味のどちらのイメージを持つかを調査した。その結果、有効回答者のうち 47% (642 名) が、シャイネスに対し肯定的な意味を持つと回答していた。この結果は、以前に同様の調査を行っている岸本 (1988) の 40.5% より高く、以前と比して、シャイであることに対してポジティブなイメージが形成されているのかもしれない。

上述の調査では男女別の結果は示されていないが、もし、本邦において特に女性がシャイであることを隠さなくてもよいという風潮があるとすれば、自己報告で測定しているシャイネスは、社会的な望ましさの影響を受けていないと考えられる。その結果、女性においては自己報告による特性シャイネス尺度の得点とシャイネス IAT 得点との間に、有意な正の相関がみられたのかもしれない。また、他の諸変数に対しても同様の理由で、特性シャイネス尺度とシャイネス IAT はともに類似した相関関係を示した可能性がある。たとえば Nosek (2007) は、顕在的な態度と潜在的な態度の相関係数は、その態度対象によって異なり、複数の要因がこの変動を説明するという。その変動を調整する変数には、対人的な要因 (interpersonal factors)、個人内の要因 (intrapersonal factors)、その他の要因 (other factors) がある。上記の議論は、このうち対人的な要因の一つである自己呈示 (self-presentation) と関連するようと思われる。他者からネガティブな評価を受けたくないなどの動機により反応を変えることは、顕在的な態度と潜在的な態度の相関係数を減少させる。したがって、「男性がシャイであることの表明を避けた」、「女性がシャイであることの表明を避けなかった」の一方、もしくは両方により、男女間で顕在的・潜在的シャイネスの相関の有無について相違がみられたのかもしれない。ただし、この点は推測の域を出ない部分が多いことから、今後さらに検討すべきである。

本研究により、顕在的・潜在的シャイネスと他の尺度との相関関係は、男女において異なる可能性が示された。潜在的シャイネスを扱った研究では、尺度得点の平均値という性差について検討されることはあっても、各尺度間の相関関係について、性別に分けて検討を行ったものは少ない。したがって、今後の研究においては、性別にも注目して分析を行うことも一考に値すると思われる。

引用文献

- 相川 充 (1991). 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, 62, 149–155.
- 相川 充・藤井 勉 (2011). 潜在連合テスト (IAT) を用いた潜在的シャイネス測定の試み 心理学研究, 82, 41–48.
- Asendorpf, J. B., Banse, R., & Mücke, D. (2002). Double dissociation between implicit and explicit personality self-concept: The case of shy behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 380–393.
- 藤井 勉・相川 充 (2013). シャイネスの二重分離モデルの検証——IAT を用いて—— 心理学研究, 84, 529–535.
- Fujii, T., Sawaumi, T., & Aikawa, A. (2013). Test-retest reliability and criterion-related validity of the Implicit Association Test for measuring shyness. *IEICE TRANSACTIONS on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences*, E96-A, 1768–1774.
- 藤井 勉・澤海 崇文・相川 充 (2015). 顕在的・潜在的シャイネスと心理的適応との関連——IAT を用いて—— 感情心理学研究, 22, 128–134.
- 藤井 勉・澤海 崇文・相川 充 (2016). 現代におけるシャイネスのイメージ調査 (2) ——自由記述を中心に—— 日本グループ・ダイナミックス学会第 63 回大会発表論文集, 103–104.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464–1480.
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 197–216.
- 稲垣 勉・澤海 崇文・澄川 采加 (2020). 潜在的シャイネスの低減可能性の検討——対概念の活性化と自己との連合強化を通して—— 鹿児島大学教育学部研究紀要 (人文・社会科学編), 71, 57–66.
- Jones, W. H., & Russell, D. (1982). The social reticence scale: An objective instrument to measure shyness. *Journal of Personality Assessment*, 46, 629–631.
- 岸本 陽一 (1988). シャイネス (Shyness) に関する予備調査 日本心理学会第 52 回大会発表論文集, 803.
- 小島 弥生・太田 恵子・菅原 健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11, 86–98.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224–253.
- Nosek, B. A. (2007). Implicit-explicit relations. *Current Directions in Psychological Science*, 16, 65–69.

- 桜井 茂男・桜井 登世子 (2000). 大学生用シャイネス (shyness) 尺度の日本語版の作成と妥当性の検討 奈良教育大学紀要, 40, 235–243.
- Sawaumi, T., Inagaki, T., & Aikawa, A. (2019). Does conventional Implicit Association Test of shyness measure “self-shyness” or “others-shyness”? *Japanese Psychological Research*, 61, 142–150.
- 鈴木 裕子・山口 創・根建 金男 (1997). シャイネス尺度 (Waseda Shyness Scale) の作成とその信頼性・妥当性の検討 カウンセリング研究, 30, 245–254.
- 高田 利武 (1992). セレクション社会心理学3 他者と比べる自分 サイエンス社
- 高田 利武 (1999). 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程——比較文化的・横断的資料による実証的検討—— 教育心理学研究, 47, 480–489.
- 高田 利武 (2002). 社会的比較による文化的自己観の内面化——横断資料に基づく発達の検討—— 教育心理学研究, 50, 465–475.
- 谷 芳恵 (2012). 他者との関係調整志向と規範選考 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 5, 9–14.
- Zimbardo, P. G. (1977). *Shyness: What it is, what to do about it*. MA: Addison-Wesley.

付記

本研究は JSPS 科研費 17K13902 の助成を受けた。本論文は日本感情心理学会第 28 回大会において発表したものに加筆・修正し、あらたにまとめ直したものである。調査にご協力いただきました学生みなさまに、心からお礼申し上げます。なお、本研究のデータは、別の目的から顕在的・潜在的シャイネスに対する介入効果を検討した稲垣・澤海・澄川 (2020) と一部重複している。